

SSKP はれのちくもり

棕櫚亭通信 第84号



はれのちくもりはやっぱりはれのちくもり

～天野聖子 理事長退任にあたって～



「どうしてくもりのち晴れじゃないの？」と最近になってもよく聞かれるこのタイトルは30年間ずっと変わりません。いいことがあったと喜んでるとすぐ雲行きが怪しくなる、何とか超えて薄日が差してきたと思うと遥か向こうから暗雲が垂れ込めてくる・・・そしてまた大成功の後の無念の思いと涙など・・・その繰り返しの繰り返しなので、よかったよかったと締めくくることが出来ない仕事だと思ってきました。だからこそ「いいこと探し」や「明るく元気に美しく」のスローガンなのです。

思えば1987年作業所設立当時はないものづくしでしたが、男性メンバーがずいぶん力強く助けてくれました。トラブルも多かったのですが、やっと出来た作業所を良いものにしたいという彼らの熱い思いと、何とか形を作ろうと「四人の魔女」といわれた私達職員の連携がその後の勢いを作っていました。同じような年齢でしたが、彼らの多くが既に亡くなったり、重い病気になったという辛い現実もあります。もっと穏やかな老後を迎えて欲しかったのに、とふと申し訳ない気持ちになることもあります。

それでも彼らの思いや希望を現実にしようと近年は就労支援に力を注いできた結果、法の後押しも制度改正も相次いで、時には大企業に就職することまでできるようになりました。「精神障害者は働けない、働かないほうがいい」と断言された頃から見れば雲泥の差で、この就職する・できるという輝かしさにずいぶん救われてきました。そのような私達の実践とともに、病気があっても働きたいという希望を持つ人が圧倒的に増え、当事者の活動ぶりも目覚しく、その輝かしさに目を奪われることも増えました。

そうは言っても物語に終わりはありません。働き続けることの大変さ、同居の親の介護、長引く症状の上に癌や脳梗塞などいまや高齢社会の中で誰にでも訪れる病も多々潜んでいます。加えて年金打ちきりや不十分な老後保障、生活力の低下など取り組むべき課題は増えるばかりです。

そんな風に「はれのちくもり」的乱高下を繰り返しながら、来年30周年を迎える棕櫚亭ですが、創設者である私も30年間働いて、11月には理事長職を退任、3月31日をもって職員としても引退となります。理事長退任にあたっては、女性で現場ワーカーという位置を踏襲し、現常務理事の小林由美子に引き継ぎました。そして常務理事にはピアス施設長の高橋しのぶが就任しました。社会福祉法人は丁寧につなぐもの、よりよく続けるものと信じ、周りに先駆けて世代交代を決めた次第です。

社会が生み出す病の部分も、人が持つ生来の苦さとしての病の部分も織り交ぜながらの仕事であり、さらに昨今は異業種が突然ライバルとして算入し続ける福祉の世界は、永遠の「はれのちくもり」の世界ですが、それでもメンバーの笑顔に報われ、自分の変化も感じられるやりがいがあります。

個人的には精神病院では不適應で5箇所も転職を繰り返した私ですが、棕櫚亭でいろいろな人達に助けられながら、無事に30年働き続けることが出来ました、御協力いただいたすべての皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。



理事長就任のごあいさつ

今年は、昨年11月の役員改選で、理事長交代してから迎える最初の年となりました。ここ10年、力を入れて取り組んできた組織継承に一旦の区切りがつかいましたが、走り出した新体制に、まだまだ実感が湧かないのが本音のところ です。

先日1月13日に、役員改選後、最初の理事会がありました。この理事会から天野前理事長の参加はなくなったのですが、なんだか不思議な気持ちになりました。「いつも必ずあったものがない」そんな感じがした時間でした。

またこの頃、組織の外を見た時、見える風景が以前と違ってきたように感じます。今までは天野さんの後ろから見ていた風景が、自分の目の前に大きく迫る様な気がします。見晴らしはすごくいいのですが、見ずに済んでいたものまで見えたりして、この風景に自分はどの様に太刀打ちしていけばいいのか？なんとなく気後れしたりもします。

でも、「これが継承という事なんだなあ・・・」と、「組織継承、組織継承」と言い続けてきた事を、まさに実感する今日この頃です。

ここまで書くと「大丈夫なのか？」と、皆さんから不安の声が聞こえてきそうですが、実際は、横を見れば高橋常務理事を始め、組織継承を共に進めてきた仲間達があります。後ろを見れば一生懸命働く若い職員達がいてくれます。そして何より、日々、元気に棕櫚亭の各事業所に通ってきてくれるメンバー達があります。そんな、たくさんの人達と一緒に一步一步前に進んでいきたいと思えます。実力は体験からしかつかないと思っています。幸か不幸か、今の状況は世界も日本も、そしてこの福祉分野も難題ばかり・・・これに一つ一つ対応していけば、否が応でも力はついてきそうな気がします。

今起こっている悪い変化を、少しでもいい変化に変えていける様に、これからも棕櫚亭は走り続けます。今年もどうぞよろしくお願いいたします。



理事長 小林 由美子



職員研修旅行を行いました！



今回、棕櫚亭30年の歴史の中で初めて研修旅行を行いました。近年職員同士の交流が減っている中、棕櫚亭創立30年という大きな節目に相応しい研修を行いたいと思い、中堅職員で集まって研修旅行を企画しました。そして決まったテーマは「私と棕櫚亭」という大きいテーマです。まずは天野さんに棕櫚亭の30年を語ってもらい、現リーダーの方々にメンバーとの忘れられない出会いや苦しかった体験を語ってもらいました。その後グループに分かれ、どういう組織を作っていきたいか、自分がどう変わっていききたいのかという話をしました。組織のより強い団結力が生まれた研修になったと思います。（オープナー 本田）



～参加職員の感想より抜粋～

天野さんや現リーダーの話を聞いて

30年という歴史を、年表だけでなく生きた話で聞いていることは幸せなことだと思つづく思った。その時代その時代の様子を聞きながら、その時の思いを感じた。体裁を気にするより、がむしゃらであった時代があったこと、人を上手く使っていく事の大事さ、そのための人との関係性（人脈）、実行力の大切さが印象に残っている。選択を決断する時がいく度もあり、その結果が今の棕櫚亭になっている。それを思えば、これから棕櫚亭がどういう方向に成長して行くのかは、自分たちにかかっていることをあらためて実感した。

（リーダーの経験談をきき）自分に重なるところがたくさんあったし、今は完璧と思えるまだまだ遠い存在のように思える先輩たちも同じような思いをしたことを知り、ホッとしたり、そういう経験が自分を成長させてくれる糧になる事を感じた。（増田）

メンバーと日々向き合いながら、その人それぞれがどういう生き方をしたいかという事について、一所懸命ともに考えるこの仕事は、その一つ一つの積み重ねが社会全体を健やかな方向に変えて行く取り組みだと考えると対人援助職とはとてもいい仕事だなと思う。さらに、社会福祉法人という組織として、地域や社会全体をよりよい方向に進めていくことができることは、自分自身の生き方としても喜びだと思う。職員同士でその気持ちを分かち合いながら、育ち合っていきたいと感じた。（伊藤）

これからも改革を積み重ねていくためには、新人であろうと与えられた役割をこなすだけでなく、先々の事、法人全体の事、社会の事に思いを馳せ、皆で語り合う必要がある。一昔前まではよく遅くまで残って話をしていたと聞いた。今、もしかしたら忙しさに感けて事務的な話以外に時間を割く大切さを忘れがちなのかもかもしれない。「就労支援」という御題目の元、何かを見失っているのかもかもしれない。そんなことでは、それこそ浅はかで薄っぺらい言葉しか紡ぎだせず、相手の苦悩や生きてきた歴史に思いを馳せる作業ができない支援者になってしまう。先日読んだ本で辺見庸が「きいたふうな言葉で世界を綺麗なものに装わせてしまおう（幸せな詩人たちが）最も罪深い」という様なことを言っており、どきりとしていたところである。天野さんの言う「今までの3、4倍速で力をつける」というのは、自分の中の過去の経験や歪みを見つめ直し深めていくこと、そしてそんな自分を開き言葉にして語り合うことを抜きにしては成し得ないのだと思う。（尾崎）

以前から棕櫚亭はシングルマザーが働きやすい職場環境や雰囲気だと思っていたのですが、意図したものであったことを今更ながら納得しました。女性にとって単なる働きやすい職場ではなく、女性が世帯主となって生活を充実させる職場であることが良い個別支援につながってゆくという深い考えに「そうだったのか！そんな深い意味があったのか」と驚いた内容でした。（篠原）

グループワークを行って

普段関わりが少ない職員とも「対人援助職として」というテーマで言葉を交わすのは大変楽しく、きっと普段感じていても言葉にしづらいモヤモヤしたものが、会話を通じて言葉になっていく感覚が嬉しかった。（長野）

良くも悪くも棕櫚亭らしい、優等生というか上品というか、真面目なものだったように思います。周りや相手が求める意見を出しているのを感じてしまうのは自分がひねくれているのでしょうか。嫌われることを避け、賛同してくれなくてもいいけど否定も勘弁という空気は楽ではありますが、何の発展も進化も変化もないと思います。職員の仲も良くいい職場だと思う反面、その中の良さを訝しく思う自分もいます。「言葉は発した瞬間矛盾を孕む。」これもまた辺見庸の書いていたことですが、これに怯えモノ言うことが恥ずかしく何も言えなくなった日々もありましたが、とりあえずは業務内容や立場の違いと無知を武器に好き勝手なことを言っていけたらと思います。（北村）

精リハ学会 ベストプラクティス賞を受賞しました

12月1日（金）、日本精神障害者リハビリテーション学会第24回長野大会において、「第9回ベストプラクティス賞」を棕櫚亭が受賞いたしました。この賞は、日本の精神保健医療福祉の現状を踏まえ、精神障害者のあるべき姿を展望し、それに到達するためのモデルとなる実践に贈られるものです。

この賞に推薦して下さった社会福祉法人巢立ち会 理事長の田尾有樹子さんは、推薦文にこんな事を書いてくださいました。

『精神障害者の多くが働きたいと願っている。しかし、かつてはその願いも、「再発の危険が高まるから」「無理をしない方がいい」などのパターナリズムの中で、支援者が握りつぶしてきたような歴史がある。そうした中で、棕櫚亭は当事者の願いに沿った支援を実行していこうという思いのもとに、就労支援に取り組んでいった。かつての作業所時代に期限を2年間と切って就労支援を行ったのは棕櫚亭が最初と思われる。現在、障害者総合支援法の中で、就労に関するリハビリテーションが「就労移行支援」という形で、こんなに発展してきているその最初のモデルを作ったのが棕櫚亭であり、就労リハビリテーションに大きく貢献してきていると考えられる。障害者就労を国が支持することで障害者の自立が促進されるという認識を国にもたらしたことも大きな功績で、その後の雇用率拡大や精神障害者を正式に雇用率に算定していくことにも棕櫚亭の活動が寄与してきている部分があると考えられる。』

棕櫚亭の今までの活動を評価して下さった嬉しい言葉です。そしてこの受賞は、来年30周年を迎える棕櫚亭への最高の饗となりました。今後もこの名の通り、「ベストプラクティス」を続けていけたらと思っています。本当にありがとうございました。（理事長 小林 由美子）



棕櫚亭の予定とお知らせ

2/1（水）	法人本部	おいしい時間（地域子ども食堂）へ弁当提供
2/4（土）	なびい	ご家族のための連続講座②「家族も本人もここちよく ～タッピングタッチ～」
2/21（火）	オープナー	ピアス 国立市自立支援協議会しごと部会
2/24（金）	オープナー	拡大版多摩就労研究会 in 立川
2/26（日）	棕櫚亭 I	棕櫚亭 I 地域にむけた絵画ワークショップ
3/26（日）	法人本部	第3回評議委員会・第5回理事会

詳細は法人ホームページで！随時最新情報を更新しています。

⇒ www.shuro.jp 「棕櫚亭」で検索！！

【編集後記】

一年で最も寒い時期になってまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は今まで読まなかったような本にも手を出し始めた結果、大量の未読本に埋もれております。皆様のお勧め本、是非教えてください。

今回の通信は様々な人の想いが詰まった文章で盛りだくさんとなりました。他人が吟味し選び抜いた言葉を削るとするのはとても難しく、断腸の想いで編集しましたが、まだまだ文字が多いですね…。(尾崎)

【編集】 国立市富士見台 1-17-4

社会福祉法人 多摩棕櫚亭協会

はれのちくもり編集委員会

Tel 042-575-5911

【発行】 特定非営利活動法人 障害者団体定期刊行物協会

〒157-0072 世田谷区祖師谷 3-1-17-102

Tel 03-6277-9611

【定価】 100円

